

あたたかい子
かしこい子
たくましい子

学校だより

つよし

—第18号—

令和5年9月1日
平戸市立津吉小学校
文責 校長 田川定司

2学期がスタート！

保護者の皆様、地域の皆様、夏休み中は子供たちを大切に健やかに育てくださり、ありがとうございました。子供たちは、お陰をもちまして、大きなけがや事故もなく全員元気に笑顔で、2学期始業式を迎えることができました。心より感謝申し上げます。2学期は、9月に修学旅行、10月は小学校陸上大会や学習発表会、11月は持久走大会など大きな行事がいっぱいです。たくさんの学校行事や日々の学習の中で、充実した活動ができるよう職員一同努めてまいります。

今学期も保護者、地域の皆様の御支援をどうぞよろしくお願いいたします。

平和集会を行いました

「長崎原爆の日」である8月9日に、台風接近のため実施できなかった「平和集会」を本日行い、平和への誓いを新たにしました。集会では、校長の講話の後、永田記念図書館司書による読み語り、「青い空は」の斉唱を行い、戦争犠牲者の冥福を祈りました。校長講話では、「ウクライナでの戦争」や「世界の核兵器の実態」から、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考えを深めました。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）憲章前文には、下記のような言葉があります。



昨年度の献花・献鶴の様子

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に『平和のとりで』を築かなければならない。」



昨年度の平和集会の様子

戦後78年が経過し、その悲惨な体験を直接聞くことが難しくなっている今こそ、しっかりと戦争や原爆について学び、語り継いでいくことの大切さを感じています。そのことの積み重ねにより、人々の心の中に、『平和のとりで』が築かれていくのだと思います。戦争のない平和な世の中をつくる第一歩は、相手を思いやる「あたたかい心」を醸成することです。

学校でも、子供たちに豊かな心を育て、人権意識を高めていけるよう今後とも努めてまいります。

津吉小学校で毎年、平和集会の時に平和を願って歌う「青い空は」の歌は、小森香子さんが作詞、大西進さんが作曲した歌です。この「青い空は」の歌について、広島市在住のジュニアライターが、「8・6を伝える」と題して、下記のような記事を書いています。

一	二	三
※青い空は 青いままで 子どもらに 伝えたい	(※くり返し)	(※くり返し)
燃える八月の朝 影までもえつきた 父の母の兄弟たちの いのちの重みを 肩にせおって 胸にいだいて	あの夜星はだまって つれ去っていった 父の母の兄弟たちの いのちの重みを いま流す灯ろうの 光にこめて	すべての国から いくさの火を消して 平和と愛と友情の いのちのかがやきを このかたい握手と うたごえにこめて

「青い空は」は1971年にできました。幼児からお年寄りまで幅広い年齢層に親しまれています。その広がりには平和の歌では前例がないほどです。

誕生のきっかけは、平和団体などから「原爆を許すまじ」（1952年）につぐ新しい歌をつくろう、との呼びかけがあったことです。応募への誘いを受け小森さんは迷います。「原爆は通常の戦争被害と違う。被爆してないと本当のことは分からない」と考えていました。「書きたいけど、被爆者でない自分にその資格があるだろうか」と迷っていました。

そんな小森さんを後押ししたのは、海外生活でのある経験でした。二人を子育て中の61年に、夫の勤務で旧チェコスロバキアのプラハに移住します。31歳でした。翌年6月10日、プラハ郊外のリディツェ村を訪れました。42年、ナチスの弾圧で全滅させられた村です。

そこで、あるおばあさんに出会いました。バスから降りた一行を出迎えた人々の中にいたおばあさんは小森さんと子どもを見るなり「中国人か？ 日本人か？」と尋ねます。「日本人」と答えると、いきなり抱きしめて「ヒロシマ！ ヒロシマ！」と叫んだのです。「日本人だからヒロシマ？ そうだ、ヒロシマは世界の言葉なんだ」。おばあさんのしわだらけのほおには涙が流れていました。そのことを思い出した小森さんは、「ヒロシマの母」として詩を書こうと決めました。

『青い空は』の1番は「あの日のヒロシマ」、2番は「めぐりくる8・6」、3番は「世界から戦争をなくそう」との呼びかけです。

小森さんの詩に曲を付けた大西さんは「青い空は青いままで…」の「伝えたい」という表現に注目しました。「伝えようという言い方とは違って作者自身の強い思いがある」。大西さんはこの部分を、「歌いきり」にしました。文章で言うところの「、」ではなく「。」にした、という意味だそうです。

「悲惨（1番）と鎮魂（2番）、未来への確信（3番）。それぞれ違うメロディーが必要なほど詩に訴える力がある。リフレインの『伝えたい』を歌いきりにしたことで、やっと曲が動きだした。リズムがあふれてきた」と大西さんは、述べられています。

【中国新聞社発行 「10代がつくる平和新聞『ひろしま国』より】